

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K04814

研究課題名（和文）中近世の神社にみる移動と再生に関する建築史学的研究

研究課題名（英文）Regeneration and Movement on Japanese Shrine Architecture from the Medieval to the Early Modern Period

研究代表者

是澤 紀子（KORESAWA, Noriko）

日本女子大学・家政学部・教授

研究者番号：40431978

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では中近世の神社を対象として、（1）神社建築を造営した工匠の移動と、（2）神社本殿建築の移動（移築）に着目し、その流通に支えられた神社の再生について建築史的に解明することを試みた。（1）に関しては、神社本殿の内法長押の正面見廻しや枕捌にみられる技法と意匠の移り変わり、それらの造営に関与した工匠との関係を見出した。（2）に関しては、春日大社本殿および若宮神社本殿から移築された畿内各地の旧社殿を比較検討し、分布と河川との関係、正面意匠と技法を探った。とくに内法長押と繫虹梁との納まりや細部装飾に着目し、奈良県内の春日造と比較した分類を行い、旧社殿の特質を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、中世から近世にかけて装飾化を伴い展開してきた神社の本殿建築に関して、その意匠や技法、立地や環境、造営した工匠等の観点から考察を行った。とくに四天王寺系工匠や春日大社旧殿の事例をふまえ、工匠の移動や建築の移動（移築）にみる流通に支えられた神社の建築文化の一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to investigate the regeneration of Shinto shrines supported by the distribution from an architectural-historical perspective, focusing on (1) the movement of craftsmen who constructed the main shrine buildings and (2) the movement (relocation) of the main shrine buildings. With regard to (1), the study clarified changes in the techniques and designs of the front "mimawashi" and "makura-sabaki" of the front "uchinori-nageshi" of the main shrine building, and the relationship between the craftsmen involved in the construction. (2) The distribution, relationship to the river, and frontal design and techniques were investigated by comparing old shrines in the Kinai region that were transferred from the Kasuga Taisha and the Wakamiya Shrine main shrines.

研究分野：文化財保存、建築史学

キーワード：神社 本殿 中世 近世 文化財 再生 工匠 移築

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中近世の神社建築を対象として、造営に関与した工匠の移動や、建築の移築・再生に着目することで、それらの流通に支えられた神社建築における意匠と技法の伝播を明らかにし、そこでの再生手法について考究するものである。建築の建立時における意匠や技法にとどまらず、後世の変遷を取り上げて、移築や部材の再利用を含めた再生手法の実態を解明することで、中近世の神社における建築文化の特質を明らかにすることができると考えられる。とくに神社本殿が仏教建築と同様の細部意匠を取り入れて変化してゆく時期にあたる中世から近世初期に焦点をあてて、(1) 造営に関与した工匠別にみる神社本殿の意匠や技法の伝播、(2) 移築年代別・立地環境別にみる春日大社旧社殿の特質、を考察することで、地域や時代を超えて伝播した意匠や技法と、それらの背景にある再生の手法を明らかにすることを試みた。

ここでは一部限定的ではあるが、日本建築学会にて発表した論考「畿内中世神社本殿の内法長押に関する意匠と技法一見廻しと枕捌にみる近世初頭への変容」(日本建築学会計画系論文集 806, 1378-1387, 2023) をもとに成果を報告する。

2. 研究の目的

中世から近世初頭にかけて建てられた神社本殿では、内法長押を身舎の四周に廻すことが主流である一方、身舎正面には内法長押を廻さず、隅柱で見廻しとするか、あるいは隅柱で留めて枕捌とする技法がある。とくに大阪府下において、庇や身舎正面の頭貫を虹梁形とし、内法長押を「枕捌」にして彫刻欄間を入れる手法が広く用いられていることが指摘されており、その細部装飾を含む意匠の特色は、四天王寺流を基盤として成立した「桃山様式」の流れとする見解がある。このように中世から近世にかけての意匠の展開として捉えたとすれば、長押の「枕捌」と「見廻し」とは技法を区別しつつ、さらに時代を遡って、また地域を拡げ、造営に関与した工匠の記録をふまえて実態を分析することで、中世から近世につながる神社本殿の形態の展開が明らかになると考えられる。以上より、本研究の目的は、内陣や外陣という空間区分や、仏教建築同様の細部を取り入れて装飾化を伴い変化してきた中世神社建築において、正面の内法長押を見廻す技法に着目することで、新たな要素をどのように従来の形態に受け入れ、近世初頭に向けて変容したのかを明らかにすることである。ここで扱う神社本殿は、古代律令国家において国家的な意義を担った神社の形式保存とは異なる発展方向を歩んだ在地の神社本殿であり、新たな文化をいかに取り入れて適応してきたかという日本文化のあり方を示す文化財として神社を理解することを試みたい。

3. 研究の方法

研究対象は主に畿内に現存する遺構とし、大和・山城・摂津・河内・和泉にくわえ、近国の紀伊、近江、丹後を含む中世神社本殿とした。国指定等文化財建造物のなかで、現地調査および修理工事報告書等により長押の見廻しあるいは枕捌が確認できたものを抽出している。また中世神社本殿の形態の展開を追うため、鎌倉時代から近世初頭の桃山時代までの神社本殿を取り上げて、内法長押に着目し、腰長押、切目長押、半長押を参照しつつ、地域別・年代別に神社本殿の正面を形づくる意匠と技法について検証した。

4. 研究成果

(1) 身舎正面の内法長押の見廻しを用いた技法と展開

・鎌倉後期にみる正面内法長押の見廻し

対象地域をみると現存遺構では鎌倉前期以前に正面内法長押の見廻しや枕捌は見出せない。鎌倉後期になると寺院の鎮守社が散見されるようになるが、これらの中には仏教建築同様の細部を早期に取り入れて装飾化を伴い発展していく事例が見出せる。鎮守社も含め対象地域の遺構をみると、大半が四周に内法長押を廻しているものの、京都府の2棟に正面隅柱に内法長押の見廻しと枕捌が確認できる。まず、建立年代が明確な事例は京都府北部の丹波に位置する石田神社境内社恵比須神社本殿である。石田神社の旧本殿とされ、三間社流造の庇や縁が失われた現状であるが、延慶4年(1311)大々工清原憲行によるもので、身舎正面の建具は後補であり当初は外陣が吹放ちであった(引用①)。隅柱正面には繫虹梁が頭貫下端の高さ付近に取り付いていた仕口があり、内法長押の見廻し部分では繫虹梁下端に合わせて切り欠いている。この内法長押と下端を揃えるように楣があり、頭貫と楣との間は板壁とする。木割も太く、厚みのある長押が柱の両側から挟み込むように固めている。ここでは貫も通した上で、挟み梁のような構造材として長押が機能していると推察される。内法長押は当初材であり、正面建具は後補かつ外陣が吹放ちであったことを考慮しても、繫虹梁に対する切り欠きが見受けられるなど、内法長押の見廻しを用いた納まりは萌芽的段階と考えられる。なお、妻飾には虹梁大瓶束を採用しており、同時代の仏教建築にみる新様式の要素が早期に取り入れられた神社建築において、身舎正面の内法長押の見廻しが見出せること、またそれが畿内ではなく近国であることは注視すべきである。いっぽう丹波南部の愛宕神社本殿には身舎正面に長押の枕捌が見出せるものの、後世の改変とみられ

ることから当初は不明である。一間社流造で規模は比較的大きく、大正期に底部分が改変されている。身舎側背面より廻す長押に対して、枕捌とした隅柱内側の部材は、正面建具、繫虹梁とその上部に身舎正面のみ取り付けられた長押同様に後補とみられ、見廻しあるいは枕捌があった可能性は否定できない。石田神社境内社恵比須神社本殿と同様に木割が太いことは注目され、組物や臺股、太瓶束などが神社建築として早期に取り入れられた同本殿に対し、頭貫もなく舟肘木を用いた和様の愛宕神社本殿においても、長押の見廻しあるいは枕捌を採用した可能性は残されていることに留意しておきたい。

・室町前期にみる軸部と造作の整理——開放型と閉鎖型

室町前期の神社本殿のうち、山城南部と大和北部の2棟に内法長押の見廻しがある。前者は木津川に近い精華町菱田にあり、春日大社若宮社の旧殿と伝える春日神社本殿である。内法長押は、身舎側面から正面を見廻しとして六葉を飾り、内部の外陣側面へと廻す。正面見廻しの下には鴨居を、上には木鼻付の頭貫を通し、正面側の頭貫位置に繫虹梁が柄差で取り付け、柱上には組物を載せる。正面建具は開放的な格子戸で、頭貫と鴨居との間は白漆喰壁とする。ここに透かし彫りの欄間を入れる事例は室町中期以降にみられるが、柱に対する内法長押、頭貫や鴨居、繫虹梁など軸部の位置関係は、室町後期以降ほぼこれと同形式で定着していく。以上のような軸部と造作の位置関係にみる整理が、春日大社の旧殿にみられたことに留意したい。なお、畿内に現存する春日大社旧殿では多くが内法長押の下に繫虹梁が取り付け一方、約2割は長押上に繫虹梁があり臺股や木鼻など細部装飾をもつ傾向がある(引用②)。さらに、この春日神社本殿は春日造ではなく類例の少ない入母屋造向拝付であり、軒は二軒で、春日大社の現社殿と比較しても装飾が豊かである。これより伝統のなかに新たな試みが入り入れられていく過程で、部材の納まりや意匠が整理されてきた一つの可能性がうかがえる。

一方、大和北西部の矢田坐久志玉比古神社本殿は、外陣正面に建具を入れず吹放ちである。その形式手法から室町前期と推定されている一間社春日造で、腰長押上の半長押と内法長押は身舎柱の正面で見廻しとする。長押は隅大留で、釘隠し金具はなく柱に釘止めとし、開放された外陣は小組格天井である。とくに身舎正面では、内法長押の見廻し上に木鼻付の虹梁形頭貫を通して正面側は繫虹梁が取り付け、柱上には組物を置く。このような長押の見廻しと頭貫および繫虹梁の納まりは先の春日神社本殿とほぼ同様でありながら、後者が繫虹梁を柱へ柄差とみせる一方、前者は頭貫同様に繫虹梁端が柱頂部の頭貫位置に納まることが指摘できる。また、ここでは春日神社本殿とは異なり、外陣正面の開放性を伴った、もう一つの展開がうかがえるのである。すなわち、外陣を吹放ちとする開放型として、いっぽう春日神社本殿は格子戸という見え隠れの意匠をもつ閉鎖型として理解できる。中世神社本殿の変化の一つである内外陣の区分に基づき、外陣正面の建具の有無によって開放型と閉鎖型があると考えられる。

・室町中期の開放型と閉鎖型の展開

室町前期にみた開放型と閉鎖型は、神社本殿の遺構が倍增する室町中期以降にも見出せる。まず開放型として、大和の一間社春日造で室町中期と推定される天神社本殿がある。ここでは身舎正面に木鼻のない頭貫を通し、頭貫上には臺股を置いて、頭貫下に廻した内法長押は身舎正面の柱で見廻しとし、外陣は吹放ちとする。また河内の交野天神社では、応永9年(1402)の本殿と、室町中期とみられる末社八幡神社本殿があり、いずれも一間社流造で格子の正面建具を備え、下から縁長押、腰長押、その上に半長押、内法長押を廻し、正面内法長押を見廻しとした閉鎖型の展開がうかがえる。両社殿ともに繫虹梁の下に内法長押の見廻しがあり、その下端より少し下がった位置に鴨居を通して間に欄間を入れる。いずれも見廻しとした正面内法長押の上端では、柱に差し込む繫虹梁下端の面取り部程度を切り欠く造作がみられる。

ここで閉鎖型の類例として、大和の天皇神社本殿に着目したい。応永3年(1396)の一間社春日造で内外陣をもつ。彫刻欄間など正面建具周りの装飾豊かな神社本殿で、飛貫下に廻らした内法長押は、繫虹梁と同じ高さにあることから正面見廻しとせず、繫虹梁に接して留まる。正面には扉の両脇と上部欄間に透かし彫りを入れるが、彫刻欄間は身舎正面に内法長押を廻さずに取り入れた早期の事例である。四周に内法長押を廻す場合、鎌倉後期より近江や山城において内法長押下に彫刻欄間を入れる事例は存在する。しかし天皇神社本殿のように正面に内法長押を用いない彫刻欄間の登場と、先の春日神社本殿のような長押の見廻しを伴う軸部の整理が組み合わさることで、彫刻欄間の意匠上のフレーム効果は際立ってくる。これより、交野天神社末社八幡神社本殿のような意匠から、より正面性の強い意匠へと展開したことが推察されるのである。

・室町中期までの開放型と閉鎖型の展開とその背景

以上のように室町中期までの神社本殿遺構には、内外陣の区分に基づき外陣を吹放ちとする開放型と、建具を入れて暫定的に開放できる造りとする閉鎖型があるという捉え方ができる。閉鎖型には、鴨居と同じ高さに設けた内法長押の見廻し部分を切り欠き、繫虹梁を柱に柄差とする納まりが鎌倉後期からみられたが、室町以降は柱頂部に納めた頭貫と繫虹梁の下に内法長押を通して、その上下に接するように正面に通した頭貫と鴨居との間を欄間あるいは壁とする造作が散見される。とくに室町中期までの閉鎖型では、繫虹梁に対して長押の切り欠きが多々みられ、軸部と造作が整理されていく過程の多様性がうかがえる。いっぽう開放型では、同じ高さに納めた頭貫と繫虹梁の下に長押を見廻しとする技法が室町前期より採用されていたことがわかる。そこでの正面頭貫には、眉をとり両端に直線的な袖切をつけた虹梁形が出現することも看過できない。これは後述するように、室町後期以降、閉鎖型にも広く採用されている。また、内外陣の区分のもと成立する内陣正面および外陣の開放性が前提となり、内法長押の見廻しを伴う彫

刻欄間や格子戸といった透かしの造作が採用されたと考えられる。

(2) 室町後期における内法長押見廻しを用いた技法の定型化

室町後期にも閉鎖型と開放型は継承され、とりわけ摂河と紀伊における閉鎖型の系統を中心に、虹梁形頭貫と彫刻欄間を併用するなど正面内法長押の見廻しを用いた技法には共通性があり、身舎に海老虹梁が取り付く位置に変化があったことが指摘できる。身舎正面の内法長押の見廻しは、正面の横架材である鴨居や頭貫あるいは飛貫とは高さを違えて納めることにより、軸部と造作材が整理され、建築生産上の現場合合わせも合理的になる。なお、室町後期における身舎正面にみる内法長押上の貫はすべて虹梁形で、飛貫は大和1事例のみ、摂河と紀伊では頭貫である。その隅柱上に組物を据えて実肘木を用いるが、身舎に組物を、また繫虹梁から海老虹梁を用いるようになると、海老虹梁の湾曲に応じて身舎柱ではなく上部組物と取り合わせる事例も登場する。室町後期の一間社の神社本殿では、長押の見廻しとともに、これら部材の位置関係が閉鎖型のなかで定型化していったと考えられる。

このように内法長押の見廻しを用いた技法が、室町後期に一つの定型をなした背景には、各地の工匠が地域を超えて一現場に集合し活躍したことや、共通して四天王寺系の大工の関与があったことは看過できない。後述する三船神社本殿の前身建物にうかがえるように、紀伊の天文年間(1532-55)頃は、大工職をもつ地元工匠集団にくわえ、遠方から招かれた四天王寺系の工匠集団が造営に携わるといった従来の工匠組織が再構成される時代でもあった(引用③)。ただ、内法長押の見廻しを用いた技法は中世の三間社ではほぼ採用されず、一部の一間社で定型化していったとみられる。正面建具が格子ではなく、幣軸付の板扉とする閉鎖性の高い一間社には見出せないことも指摘しておきたい。この技法が、内外陣の区分にもとづく正面の開放性に起因するのではないかと推察する所以である。

(3) 桃山時代にみる技法の継承と意匠の展開

・正面内法長押の見廻しと枕捌がみられる地域

摂津・河内や紀伊を中心に室町後期の神社本殿に展開した内法長押の見廻しを用いた技法は、桃山時代の山城や近江、大和の現存遺構には見出せない。畿内全域において内法長押は四周に廻すことが主流であるものの、和泉や摂津、畿内近国の紀伊の現存遺構には長押の見廻しにくわえて枕捌の採用が確認できる。とくに見廻しの事例において、室町後期に一間社の神社本殿で一つの定型をなした技法は、桃山時代には主に三間社の神社本殿で展開したことがうかがえる。以下、地域別に各々詳述する。

・畿内近国の紀伊にみる継承と展開

紀伊では桃山時代の神社本殿のうち、唯一、慶長元年(1596)の加太春日神社本殿に枕捌が確認できるほか、さらに遡って天正18年(1590)の三船神社本殿には、身舎四周に廻した内法長押下の半長押の見廻しが類例として認められる。いずれも建築彫刻が豊かなことで知られる神社本殿である。加太春日神社本殿は、千鳥破風と軒唐破風を備えた一間社流造でありながら背面と内外陣境の柱間は三間とした、全国でも数少ない特異な形式である。ここでは、室町後期に摂津の杭全神社第三殿でいち早くみられた一つの定型——すなわち身舎正面に虹梁形頭貫、竹の節に彫刻欄間、鴨居を入れて、欄間両脇の隅柱で内法長押を見廻しとし、頭貫同様に身舎柱頂部に海老虹梁端が取り付く技法——に対して、正面内法長押は見廻しとせず枕捌を採用し、その上に側面の頭貫木鼻を出し、実肘木を用いた出組として手先に海老虹梁が取り付く技法となっている。さらに彫刻欄間をみると、室町後期の白岩丹生神社本殿と同様に、竹の節で正面を三分割し、透かし彫りの欄間を納める。工匠は不明だが、欄間は丸彫彫刻とし、臺股は内部彫刻が脚からはみ出す立体的な造形とするなど装飾豊かな建築であり、そのような建築に枕捌が採用されたことに注目しておきたい。

三船神社本殿に関しては、内法長押を四周に廻して、正面長押下に枠付きの彫刻欄間を納め、鴨居を通す一般的な技法を採用しながらも、内法長押下に入れた半長押を正面隅柱で枕捌とした特異な事例である。正面の半長押は欄間の木枠に突き当たる枕捌で、正面と内側の半長押は隅で留めとせず一木の化粧材とみえ、彫刻欄間の枠は太い。また上部が虹梁形頭貫ではなく長押であることで彫刻欄間の上部形状は水平となり、欄間の彫物としての分業が容易となる造りであるとも考えられる。現本殿は天正18年(1590)に木食応其の本願により再建されたことで知られ、その棟札に記された大工「刑部左衛門」といえば紀伊の根来坂本の大工で、慶長4年(1599)の摂社棟札に「大工刑部左衛門藤原姓丹後守吉次」とある。この人物については慶長12年(1607)の大崎八幡宮はじめ仙台城、瑞巖寺において、紀伊から赴き造営に携わった「棟梁刑部左衛門国次」との血縁関係が指摘されてきた(引用④)。仙台藩の御大工となった山城の梅村日向守吉次に雇われた経緯があり、彫物の技術に優れた刑部左衛門一族ゆえの雇用であった可能性は高い。そのような刑部左衛門一族が、大工とは異なる職分を果たす「彫物師」「彫工」といった呼称が記録として現れる以前にあって、それらの分業に適した形態への追求があったとしても不思議ではないだろう。

桃山時代の紀伊の神社本殿をみると大半が内法長押を四周に廻すことが確認できる。一方、これまでみてきたような正面内法長押の見廻しを用いた技法は、現存遺構のなかでも各時代それぞれ一割前後であるが、建築彫刻に優れた神社本殿に具現化され、中世から桃山時代へと伝播した一つの技法であったといえよう。そこには中世同様に遠方と在地の工匠との組織体制や、伝統への新たな試みがうかがえる。

・和泉・摂津にみる継承と展開

和泉では桃山時代の遺構が多く、内法長押の見廻しあるいは枕捌の採用が確認できる。慶長7年(1602)の泉穴師神社本殿は、三間社流造で正面千鳥破風付の一間社流造の二棟を相の間で連結した形式である。正面内法長押は三間社の身舎正面各柱で見廻し、外陣から内陣正面へ各室とも廻している。内法長押の見廻し部には六葉金具を取り付け、長押下に鴨居、長押上に木鼻付の頭貫を通し、それらの間には各間に前身建物より転用した花菱欄間を入れている。海老虹梁は頭貫位置に納まる。これらは内法長押の見廻しを用いた技法として、室町後期に一つの定型をなした一間社にみる技法をそのまま連結したような形式である。永禄12年(1569)の棟札に「大工天王寺住人酒見守宗広」とあり、檜皮大工ではあるが四天王寺系の大工の関与が確認できる。このほか慶長10年(1605)の泉井上神社境内社和泉五社総社本殿は三間社流造で、正面内法長押を隅柱で見廻しとし、長押下に鴨居、長押上に木鼻付の頭貫を通して、三間それぞれ立湧の文様を用いた透欄間とする。泉穴師神社とともに、これら桃山時代の和泉には、内法長押の見廻しを用いることで室町後期に一つの定型をなした技法の継承がたしかに確認できる。そこでは虹梁形頭貫ではなく下端が水平な頭貫とし、具象的図柄の透かし彫りではなく幾何学的文様の透欄間を採用している。ほか摂津の事例として、池田にある慶長15年(1610年)の八坂神社本殿は一間社春日造で、正面内法長押は見廻しとせず枕捌を採用し、内部の外陣側面には長押を廻していない。摂津の高売布神社本殿や紀伊の加太春日神社本殿と同じく、正面には彫刻欄間、上は頭貫、下は鴨居を通して格子戸を納めており、ここにも一つの定型をなした技法が見出せる。これらの事例から、外陣正面を吹放ちとする開放型が内法長押を見廻すことに対し、外陣正面に格子戸を入れる閉鎖型でも大半は見廻しの意匠が継承されてきた一方で、枕捌として留める技法は、いわば外陣の開放性ととも成り立っていた意匠が、正面外部のみの意匠として形骸化したものと考えられる。

(4) まとめ

畿内を中心とした中世神社本殿の内法長押に関する意匠と技法について、鎌倉時代から桃山時代までの神社本殿を取り上げ、中世から近世初頭にかけて年代別、地域別に検証した結果、以下のことが明らかになった。

内法長押の正面見廻しを用いた技法は、近世に向けて装飾化を伴い変化していく中世神社本殿において、正面性の表現に一役を担ったと考えられる。それは一間社を中心に展開した。木鼻や墓股といった細部装飾にくわえ、柱上の組物や庇に海老虹梁採用されると同時に、身舎正面の内法長押を隅柱で見廻しとすることで、建具上には彫刻欄間や虹梁形頭貫といった、仏教建築同様の装飾要素をもつ部材が取り入れられていった。

とくに内陣と外陣が区分されることで、外陣正面が板扉の場合は祭礼時などに暫定的な開放性を獲得し、また外陣正面が格子であれば見え隠れによる恒久的な開放性をもつとみられ、ここに正面の内法長押を見廻して透かし彫りの彫刻欄間を入れることで開放性は装飾化とともに高まることがうかがえる。このような意匠は、室町後期までには摂津や紀伊の一間社ですでに確立していた。これらが、桃山時代になって三間社の意匠としても開花したとみることができる。内法長押の見廻しに関する意匠は、一間社にこそ早期に、また寺院の鎮守社に多く取り入れられたことは注目すべきである。ただ神社本殿における正面長押の見廻しは、丹波に位置する三間社が最初期とみられ、虹梁大瓶束の妻飾など仏教建築同様の要素を取り入れた建築に、かつ畿内近国から見出せたことは特筆すべきである。

さらに、このような中世末期の展開の背景には、四天王寺系の大工による造営関与が共通要素として確認できた。中世末から近世にかけての遺構数の多さから、桃山時代につながる建築意匠は大阪府南部と和歌山という領域で注目されがちであるが、本稿で取り上げた技法に注目してみれば、北部の摂津と河内、畿内近国の紀伊での四天王寺系大工を核とした造営を経て、桃山時代の和泉にも通ずる一つの展開が理解できる。なお、室町後期や桃山時代には、正面内法長押を見廻しとせず外部で枕捌として留める技法もみられ、外陣の開放性ととも成り立っていた意匠が、正面外部のみの意匠として形骸化したと捉えることもできる。すなわち、一つの定型化した技法であったことにくわえ、それが同時代の意匠として昇華されていたと考えられるのである。

<引用文献>

- ①永井規男『石田神社本殿及び境内社西宮社本殿詳細調査報告書』関西大学工業技術研究所、1985、pp. 7-21
- ②豊田円・是澤紀子「春日大社旧社殿にみる形態的特質—本社本殿と若宮社との比較による考察—」日本建築学会大会学術講演梗概集、2021、pp. 851-852
- ③鳴海祥博「社寺建築の中世から近世への転換—紀伊における近世初頭の建築意匠とその成立に関わった近畿の中世建築意匠」『普請研究』第七号、普請研究会、1984、pp. 2-42
- ④生田真菜・是澤紀子「大崎八幡宮の造営に関する研究—絵師と工匠にみる背景について—」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2021、pp. 855-856)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 豊田円・是澤紀子	4. 巻 2022
2. 論文標題 春日大社旧殿の立地と河川に関する考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 317-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山ともみ・是澤紀子	4. 巻 2021
2. 論文標題 江戸期の絵図にみる東大寺八幡宮本殿の内部空間の特質	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 857-858
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生田真菜・是澤紀子	4. 巻 2021
2. 論文標題 大崎八幡宮の造営に関する研究 - 絵師と工匠にみる背景について -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 855-856
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊田円・是澤紀子	4. 巻 2021
2. 論文標題 春日大社旧殿にみる形態的特質 本社本殿と若宮社との比較による考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 851-852
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 是澤紀子	4. 巻 135
2. 論文標題 歴史的建造物の古色と模擬 素材を生かす美意識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築雑誌	6. 最初と最後の頁 48-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 是澤紀子	4. 巻 なし
2. 論文標題 臺股 伝播とかたどり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 伝わるかたち伝えるわざ 伝統と変容の日本建築	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 是澤紀子	4. 巻 806
2. 論文標題 畿内中世神社本殿の内法長押に関する意匠と技法 見廻しと枕捌にみる近世初頭への変容	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会計画系論文集	6. 最初と最後の頁 1378-1387
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊田円・是澤紀子	4. 巻 2023
2. 論文標題 春日大社旧殿にみる内法長押と繫虹梁との関係 奈良県内一間社春日造との比較	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 125-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 野村俊一編 / 野村俊一・赤澤真理・海野聡・加藤悠希・是澤紀子・鈴木智大・登谷伸宏・中村琢巳・西松秀記・光井渉・米澤貴紀著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 伝達と変容の日本建築史 伝わるかたち伝えるわざ（分担執筆「暮股 伝播とかたどり」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------